

日本道路建設業協会（道建協）は29日、生産性向上の取り組みを進めているi-Pavement推進本部（本部長・増永修平会長）の活動として、大林道路が千葉県内で行っている情報通信技術（ICT）を駆使したICT舗装工の現場見学会を開いた。技術者30人が参加。3次元起工測量からの設計データに基づき自動制御された舗装機械による作業などの説明を聞き、稼働状況を見学した。

生産性向上の取り組みを会員企業に促すが狙い。同本部主催の見学会は初めて。見学会を行ったのは、関東地方整備局首都国道事務所発注の「道路休憩施設舗装他工事」（市川市国分6丁目地内）の現場。現地では、

道建協i-Pavement推進本部が初の見学会

レストランをはじめ休憩装（路盤工、舗装工）を施設などを設置する「道」の駅」の駐車場の建設が3次元測量などを行うICT施工で進行中。舗装については、受注者の大林道路は、ICT舗装工として路盤工やアスファルト舗装を対象に、

大林道路のICT舗装現場で



現場では、ICT舗装の自動制御されたモーター

データ納品を行う。3次元設計データと起工測量で得た点群データを活用し、施工土量を自動算出した上で、自動追尾型のトータルステーション（TS）と通信する舗装機械を稼働させている。RSの適用によって管理断面の間の施工数量の算出が正確に算出でき、舗装機械が自動制御されるため、丁張りが不要になる。人と舗装機械が近づくリスクを大幅に減らした。

施工の精度が向上したことで、路床盛り土の天端標高較差は、規格値の50mmに対し平均値ベースで1・2mm、同150mmを認める最大差は101mmにとどまっている。出来形検測・検査では、断面ごとに厚さ・高さ・幅などを人が掘り起こして実測する従来の作業が3次元の点群データ管理に置き換わり、書類作成の負担を緩和できている。大林道路は、施工に当たりプロジェクトチームを組織し、測量メーカーと共に作業を行っている。ICT関連の施工を巡っては、UAV（無人航空機）とRSの測量性能の差に伴う手間や、計測のためのレーザーが舗装面で反射する現象からの影響などを課題と捉えている。従来工法と比較すると、外注を含め3次元データ作成の負担が生じるものの、「（ICT舗装の実施は）前向きに捉えられる」（河原秀臣工事企画部副部长）と手応えを示す。生産年齢労働人口の減少を見据え、ICT舗装には意欲的に取り組む方針という。道の駅は、東京外かく環状道路（外環道）の千葉県区間の整備に関連して工事が行われている。現場見学会に先立ち、一行は松戸市内の外環松戸相談所で金子文夫関東整備局首都国道事務所副所長から事業概要の説明を受け、外環道の専用部と一般部を視察した。見学会には金子副所長ら国交省の関係者も同行した。

